

HomeDry News

ホームドライニュース No.94



ファッション・ワンポイント: 冬のデニムはハイライズ
 絵画の中の洗濯風景: 洗濯物を干した家
 衣類のケア講座: 羽毛の基礎知識と注意点
 衣生活の知恵: ストープには後ろ向きにあたらなくて!

まごころクリーニング
ホームドライ
<http://homedry.or.tv/>

絵画の中の洗濯風景

洗濯物を干した家



エゴン・シーレ作

エゴン・シーレ(1890-1918年)は、日本でも大変人気のあるグスタフ・クリムトと同じ、ウィーン分離派の画家です。画家として知らない人でも、「エゴン・シーレ」という名前には、どこか聞き覚えがあるかもしれません。それはおそらく、2017年に日本でも公開された映画『エゴン・シーレ 死と乙女』によるものかもしれません。

彼は、28歳という若さで、今日世界に蔓延している新型コロナウイルスと比されるスペイン風邪によってこの世を去った悲劇の画家といわれています。その一方、極端にねじれた身体の造形や当時としては異常な性描写などから、サイコパス的な画家ともみられていました。しかし、彼の才能を高く評価していたのは、師匠でもあるクリムトでした。反社会的で、異常な性癖の人と見られた彼が、後世において高い評価を得たのもクリムトの支持があったからでしょう。

この「洗濯物を干した家」は、人物画の多い彼の作品としては数少ない風景画です。静かな家並みのたたずまいに、人の暮らしを感じさせる洗濯物が干されています。どこか、屈折した心が、人の生きる温もりを求めているように感じられる作品です。

ファッション
 One Point
 アドバイス

冬のデニムは ハイライズ

ハイライズとは、股上がウエストの一番くびれているあたりまでくる深いものを指します。昔は「ハイウエスト」という名前が一般的でしたが、十数年前に、股上の浅いローライズデニムが大ブレイクしてからは、この“ローライズ”に対して、股上の深いものを“ハイライズ”と呼ぶようになりました。

このハイライズデニムに、トップスをインするスタイルです。トレーナーのようにかなりゆったりとしたデザインのトップスをインするのがお洒落なようです。



気になるのがデニムの丈。足元はバランスを考えて、あまりポテポテともたつかせないことがポイントかも知れません。すっきりと、アンクル(ankle)丈かクロップド(cropped)丈にして、ショートブーツやローファー、ピンヒールと組み合わせるのがお勧めです。

そして、カラーはBlackとLight Blue。人気を集めそうなのは、全身を黒でまとめるオールブラックの装い。定番であるグランジ(汚らしい)風スタイルだけでなく、華やかな赤など合わせるカラーアイテムを際立たせるコーディネートも登場していますので、気軽にトライしてみましょう。



衣類のケア講座

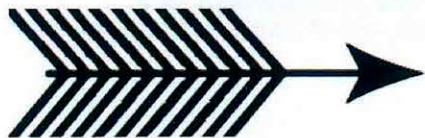
羽毛の基礎知識と 注意点

●羽毛の飛び出しは止められない

羽毛製品といえば、ダウンジャケットと羽毛布団が代表的なものです。これらの製品に使われている生地は、一般の衣類とは違う点があります。それは、ダウンプルーフ加工という特殊な加工が施されているということです。

ダウンプルーフ加工とは、生地を目詰めをすることを目的としたもので、蒸気ローラーによって生地をつぶすなどの加工が行われます。

羽毛は、羽枝（うし）といわれる枝分かれ状のものが矢のように一方向にしか動かないという性質があり、わずかな隙間からでも飛び出してくるからです



針の先のような小さな穴が開いても、羽毛は飛び出し始め、飛び出すたびにその穴は押し広げられその穴をふさがない限り、飛び出しを止めることはできません。



ですから、ダウンウェアにブローチを付けるなどとんでもないことです。羽毛布団なども、引っ掛けに注意しましょう。

●水鳥羽毛は保温性が高い

衣類や布団に使われる羽毛は、ゲース（ガチョウ）やダック（カモ・アヒル類）の水鳥羽毛に限られています。水鳥の羽毛は、立体的で丸みがあり、空気をたっぷりと含んで保温性・弾力性があります。

また、帽子の羽根飾りや赤い羽根募金などに使われている羽根は陸鳥のもので、形状が比較的平らなので、生地に沿った形で取り付けることができ、ドレスの飾りにも使われます。

●ダウンとフェザー

ダウンは、ダウンジャケットと製品名にも使われている保温性羽毛素材の代表的なものです。ダウンボールとも呼ばれるように、羽枝が立体的に放射状に延びています。

フェザーには、スモールフェザーとラージフェザーがあり、その形は幹になる羽軸（うじく）から羽枝が生えるという構造で、一般的に親しまれている羽根ということになります。



ストーブには 後ろ向きにあたらないで！



ストーブで生地が焼け焦げたり、溶けたりしてしまうことがあります。特に後ろ向きにあっていると、その時には気がつきにくいからでしょう。

クリーニングの後に見つかる焦げというと、すぐにアイロンを思い浮かべますが、現在のドライクリーニングの仕上げは、ほとんど蒸気プレスですから、局部的に焦げるということは考えられません。

ストーブの金属製のフェンスの部分では、かなり高温になり、ナイロンなどの合成繊維は、これに触れると溶けてしまうことがあります。

焦げたり溶けたりしても、汚れにまぎれて気づかないでいると、洗濯やクリーニングで目立つようになってしてしまうこともあります。